Human Developmental Research
2009.Vol.23, 85-94

３歳児における遊びと仲間関係の共発達

－遊びのなかでの間主観的な相互作用の変化が親密性の形成に与える影響に着目して－

東京大学大学院　日本学術振興会特別研究員　　高　櫻　綾　子

Mutual Development of Play and Peer Relationships among 3-year-olds: Influence of Intersubjective Interactions on Intimacy Formation

Graduate School of Education, The University of Tokyo
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science　　TAKAZAKURA　Ayako

本研究の目的は，間主観的な相互作用と親密性形成との関連について検討することである。そこで研究１では，間主観的な相互作用として幼児が園生活で多用している「ね」発話を取り上げ，そのカテゴリーを作成するとともに，二者関係の変化との関連を分析した。その結果，「ね」発話は 15 の機能別カテゴリーに分類され，相手との関係の深まりが二者間で使用する「ね」発話の種類や発話数に反映することが明らかとなった。これを受け，研究２では間主観的な相互作用が親密性の形成に与える影響を検討した結果，自分たち以外によって生起された事象に対する情動や意図，遊びのイメージを間主観的に把握することによって，親密性の形成が促進されることが示された。以上より，親密性は互いを間主観的に把握していく過程の中で形成されることが明らかとなり，保育者が幼児を間主観的に理解することを基盤に，幼児同士の間主観的な相互作用を支援する必要性が示された。

【キー・ワード】　間主観性，親密性，「ね」発話，遊び，仲間関係

This study observed 3-year-old children in a nursery school and examined the relationship between intersubjective interactions and intimacy formation. Study I focused on *ne*-utterances as intersubjective interactions that are used frequently by young children. The categorization of *ne*-utterances and whether they change as the relationship between children grows deeper were examined. The results suggested 15 categories of *ne*-utterances and that changes in the children's relationships influenced the type and number of *ne*-utterances used in their interactions. Study II examined how intersubjective interactions influence intimacy formation. The results indicate that intimacy formation is promoted by children's grasp of intersubjective feelings and intentions not only regarding each other but also regarding other matters (e.g., outsiders) or the image of play. Thus, intimacy is formed through a process whereby children develop intersubjective understandings. It is important that teachers support intersubjective interactions between children by modeling the experience of intersubjective understanding

between teachers and children.

【Key Words】intersubjectivity, intimacy, *ne*-utterances, play, peer relationships

問　題

幼児は一緒に遊ぶなかで主体的に仲間関係を形成する。特に３歳は大人（e.g.親，保育者）との関わりを中心としていた関係から同年齢他児との関係へと発達していく時期であり，この時期に同年齢他児と仲間としての関係を築く経験を得ることは，生涯にわたって他者と関わり合いながら生きていく上での基盤となる。そのため遊びと仲間関係の共発達を促進することは，保育実践における重要な課題である。

その際，幼児の関係すべてが同一の性質を持つものではなく，幼児が相手との親密度によって関わりの内容を変えていること（e.g.原，1995；中川・山崎，2004；山本，1995）を考慮する必要がある。特に同年齢他児へと関心を向け始めた段階の幼児は，特定の相手と継続的に関わり合うことに特別な安心感を抱くとともに，その特定の相手との親密性を基盤に，仲間との遊びや関係性を発達させていくと考えられる。

そこで筆者はこれまで遊びと仲間関係の共発達を媒介するものとして「親密性」を取り上げ，検討してきた。その１つとして，高櫻（2007）では幼児間の親密性形成に必要とされる３概念（自発性，対等性，互恵性）を提起した上で，３歳児二者間における親密性の形成過程を検討し，親密な二者間においては直接名前を呼ばれなくとも「ね～」の一言を自分に対する呼びかけだと理解し応答できる一方，第三者との対峙場面において「○○だもん，ね～」といった発話を交わすことで二者間の結束を強めることを示した。このことからは幼児が“好き”といった感情や“いつも一緒に遊ぶ”という行動面の認識だけでなく，“この子と同じ気持ちだ”など，情動や意図の一致によっても，相手との親密性を感じ取っていると考えられる。この相手の情動や意図を感じ取ることを「間主観性」と言う。

間主観性（intersubjectivity）とは，広義の情動としての vitality affect や身体の動きに基づけられた「あなた」の意図が「いま，ここ」において「あなた」から「私」へと伝わるということ（鯨岡，2006，p.117）である。ただし，間主観的に「分かる」ということには，「しっかり，ぴったり分かる」から「ぼんやり分かる」を経て，「しっかりとは分からない」までの連続体が横たわっている（同書，p.139）。そのため，間主観的にしっかり分からない場面でも，相手を主体として受け止めることが，その関係の展開に重要な意味をもつ（同書，p.141）。

この間主観性について，幼児間では，大人－幼児間以上に困難が生じると予想される。しかし幼児が互いを間主観的に把握しようとしながら関わり続けるならば，鯨岡(2006)が指摘するように，ふと，間主観的に分かる局面が訪れ，それを基点にまた関係が深まっていく（p. 141）と考える。すなわち保育実践において，幼児間での間主観的な相互作用を支援し得るならば，親密性の形成やそれを基盤とした遊びと仲間関係の共発達も可能であると言える。

よって本研究では，保育園の３歳児クラスにおいて１年間の参加観察を行い，間主観的な相互作用

と親密性形成との関連について検討することを目的とする。なお本研究は，「親密性」を基軸とした遊びと仲間関係の共発達に関する一連の研究に位置づけられるものであり，その一部は既に検討している。そのため本稿は，これらの結果を併せた報告とする。

研究１

目　的

「ね」を用いた発話（以下,「ね」発話と記す）は，「一緒に遊ぼうね」や「ね～仲間に入れて」のように，幼児間で交わされているだけでなく，保育者から子どもへの発話（e.g.「えらかったね」）にも認められ，幼児にとって身近なものである。それゆえ幼児は相手との関係やその場の状況に応じて，「ね」発話を使い分けていると考えられるが，「ね」発話には情動や意図が暗黙的に込められるため，それを間主観的に把握し得るかは，高櫻(2007)で指摘したように，相手との親密性に左右されると考える。

そこで研究1では，間主観的な相互作用として「ね」発話を取り上げ，検討する。ただし「ね」発話はこれまで主に情報伝達に関する研究において，終助詞としての使用が検討されてきたことにより(e.g.岡本，1993)，幼児が遊びのなかで交わす「ね」発話に着目した研究は行われていない。また幼児はシナリオに基づく情報伝達よりも，遊びのなかでのやりとりとして「ね」発話を使用しているため，終助詞だけではなく，呼びかけや前後が省略された形の「ね」発話もある。

そのため研究１においては，まず幼児が遊びのなかで使用した「ね」発話の実態に基づき，「ね」発話のカテゴリーを作成する。その上で，クラス内で「ね」発話を多用した２人の幼児を取り上げ，その幼児が３歳児クラスの１年間を通して一緒に過ごすことを望んだ相手との間で交わした「ね」発話と二者関係の変化との関連を検討する。なお研究１は高櫻（2008）において検討しているため，方法および結果と考察については研究２に係わる事項のみを簡潔に記す。

方　法

対象児：都内私立保育園3歳児クラス 20 名(男児 14 名，女児 6 名)

観察期間：2007 年 4 月～2008 年 3 月の各月2回

「ね」発話の使用に関する要因：本研究では，共に遊ぶことを志向し，遊びや遊びのなかで生じる多様な感情を分かち合うことを前提に「ね」発話が発せられると考え，「共に遊ぶことへの志向度」（一緒に遊び（続け）たいという思い，一緒に遊んでいるという認識）を「ね」発話使用の基盤とした。さらに３歳児は一般的に自己主張が強いという発達的特徴を持つとされることから，「ね」発話使用時に，自分の意思を通したい思いと，自分の意向にそってくれることを期待しつつも相手の意思に合わせようとする思いのどちらが強いかを区別する必要があると考え，これを「優先度」（「ね」発話使用時に自分と相手のどちらの意思を優先する意図を持っているか）とした。これらはともに話し手が認知する世界における値（岡本，1992）である。

結果と考察

（1）「ね」発話のカテゴリー

２人以上が遊ぶ場面で参加観察を行い，遊びの開始から終了までをビデオカメラで撮影するとともに筆記記録をとり，フィールドノーツを作成した。その上で前後の文脈も含め，全ての会話を文字化し，一人の子どもの発話が他児の言動によって遮られるまでを１会話として，１会話の中での「ね」発話をカウントした。この結果として得られた，「ね」発話の使用に関する全体像は，高櫻（2008）で分析しているため，本稿では割愛する。

「ね」発話の分類については，まず語尾に「ね」がつくもの（e.g.「○○ね」）と，冒頭に「ね」を用いた呼びかけ（e.g.「ね～」）に大別した。その上で，各「ね」発話によって相手に伝えられた内容と意図を判定するとともに，相手からの受容に対する話し手の期待や欲求の強さをもとに，自分と相手のどちらの意思を優先する意図を持っているか（あるいは同等か）を判定した。その結果，得られた「ね」発話のカテゴリーは表１に示す通りである。

表１　「ね」発話のカテゴリー

位置	優先度	種類
語尾	自分＞相手	**宣言**:ごっこ遊びでの役柄，玩具の所有権，自分の行動等の表明や説明，他児の行動に関する指示。
		念押し:直前の発話を繰り返す代わりに使用したり，自分の主張に対し，相手に期待する行動の実現可能性を増す。
		同意を求める:自分の主張に相手が同意することを強く求める。“相手の意見をうかがう”「ね」発話に比べ，相手の同意を得ることへの欲求や確信が強い。
		自己主張:自分の意見や感情を直接表現する。また「自分の名前」「だって」等の語尾につけ，その意見が自分のものであることを明示する。“間を繋ぐ”「ね」発話より自分の意思を主張する度合が強い。
		第三者の排除:自分と遊び相手以外の第三者を排除する。
		相手を言い含める:相手が自分の意思に従うように相手の気持ちや行動を引きとめる。
	自分＝相手	**一体感の共有**:楽しさや互いの気持ち等を共有する。またその共有によって生じる一体感を表す。
	自分＜相手	**間を繋ぐ**:言葉と言葉の間に「ね」を挟むことで自分の考えや気持ちを表現する。“自己主張”の「ね」発話に比べ，自分の意思を主張する度合は弱まる。
		相手に同意する:　相手の意見や気持ちに賛同，同調する。
		相手の意見をうかがう:相手の意見や気持ちを尋ねる。“同意を求める”「ね」発話より相手の意思を尊重し，自分の意見に対して同意するか否かの選択権は相手にある。
冒頭	自分＞相手	**抗議の呼びかけ**:相手の言動に抗議する。
		注目を促す呼びかけ:相手の関心を自分の話題や遊びに向ける。“誘いの呼びかけ”や“提案の呼びかけ”に比べ，直後に相手の名前を呼ぶ等，相手の視線や顔を自分の方へ向けさせ，確実に相手の注意を引きつける。また「仲間にいれて」「かして」等，相手から同意されることへの欲求が強い内容の呼びかけに使用される。
	自分＜相手	**問いの呼びかけ**:相手に質問する。
		誘いの呼びかけ:相手を自分の話題や遊びに誘う。相手からの受諾への期待はあるが，“注目を促す呼びかけ”に比べ，誘いを受けるか否かは相手の意思に委ねる。
		提案の呼びかけ:遊びの種類や場所等を提案する。“注目を促す呼びかけ”に比べ，提案への同意は期待しつつも相手の意思に委ねる。

（2）「ね」発話と二者関係の変化との関連

高櫻（2008）では，一組の幼児（キョウカとミカ）が３歳児クラス終盤になるにつれ，互いの提案を拒

否する一方，それを許容しつつ遊びを長時間にわたって展開する様子が認められた。そこで二者間での関わりと「ね」発話の関連について検討した結果，二者関係の深まりに伴い，「ね」発話数が増加しただけでなく，自分の意思を主張する「ね」発話と相手の意思に合わせる「ね」発話の対等な使用が認められた（“相手に同意する”，“相手の意見をうかがう”，“注目を促す呼びかけ”の３項目は同数であり，“念押し”，“自己主張”，“間を繋ぐ”，“抗議の呼びかけ”の４項目もほぼ同数を発していた）。これにより，相手との関係の深まりが二者間で使用する「ね」発話の種類や発話数に反映することが明らかとなった。

研究２

目　的

研究１の結果を受け，研究２においては，同じクラスの他の子どもたちとの関わりも含め，キョウカとミカの相互作用について間主観性の観点から考察し，親密性の形成に与える影響について検討する。

方　法

全フィールドノーツの中からキョウカとミカに関する事例（個人，二者間，第三者を含む）を抽出した上で，本稿では，キョウカとミカの関わりが頻繁に観察された秋以降の事例の一部を掲載し，考察する。なお子どもの名前はすべて仮名である。

事例の考察

【事例1：11 月 6 日】キョウカとミカが2人並んで粘土をしている。「どうやってやったか教えてあげよーか？」と言うミカに対し，キョウカは「知らなーい」と答えるが，ミカは気にせず，「こうやってくっつけたんだよ。くっつけたんだよ，キョウカちゃん。もう1回やり直そう」と言う。一方，「キョウカちゃん，なんで立ったの？さっき」と尋ねるミカに，キョウカが「だって**ね**[a)]」と答えようとした途端，ミカは「ちょっと待って，ミカちゃん今作ってるから」と言う。するとキョウカは「ミカちゃーん，私**ね**[b)]，ミカちゃんのよりいいもの作ってるんだから**ね**[c)]。教えないから**ね**[d)]」と言い，ミカも「ミカちゃん，ピーナッツ作ってるんじゃないから**ね**[e)]。ペロペロキャンディー作ってんだから**ね**[f)]」と応じる。（すべて“自己主張”）

相手の情動や意図を間主観的に把握しようとする際，心身の発達が同程度である幼児間では，相手の発話をきちんと聞かなかったり，“自己主張”など相手よりも自分の意思を尊重する度合の強い「ね」発話を用いて張り合うことも少なくない（事例１）。

しかし幼児にとって自分の意思を主張するのは，“相手に自分を知って欲しい”という気持ちの表れであり，その相手は誰でもいい訳ではなく，“自分にとって大切な存在”である。また双方が自分の意思を主張し合うことは，相手の情動や意図が直接伝わってくることと表裏一体をなすものである。そのため自分の意思を主張し合う経験を通して，徐々に直接表現されなくとも相手の情動や意図を間

主観的に把握できるようになっていくと考えられる。

実際，キョウカとミカの１年間の関わりを観察していると，自分の意思を主張し合いながらも，相手がどこまでならば自分の要求を許容してくれるかを試し，互いの欲求の落とし所を探っているように感じられることが多かった。

【事例2：12 月 18 日】キョウカとミカが園庭で一緒に遊んでおり，キョウカが「鬼がいたよー，鬼ー!」と言う。そこへ通りかかったゲンタが「どこどこ？キョウカちゃん，どこ？」と尋ねるので，キョウカは「あれだー！」と遠くを指差し，「急げ，急げー！」と言ってゲンタに退治するよう促すが，鬼はキョウカの想像で実際には目に見えないので，ゲンタは退治に行かない。一方ミカは，キョウカの「鬼がいたよー，鬼ー!」の言葉にすぐさま反応し，「きびだんご，きびだんご。作ってあげようか，キョウカちゃん」と言い，キョウカも「食べたーい」と答え，2人で作り始める。その会話を聞いたゲンタはキョウカとミカの遊びに加わる。キョウカから「**ねーねー**[g)]ゲンタ君，猿と犬，猿と犬だよ」と言われ，それに応答する形でミカからも「雉もつれてって」と言われるものの，ゲンタは2人が何の話をしているのかが分からず，応答しない。そこでキョウカが「**ねーねー**[h)]きびだんご，なくさないで**ね**[i)]」と言うと，ゲンタは「まかせといて」と返答する。しかしキョウカとミカが「きびだんご作ったよ」と見せ合ったり，「おこしにあげよう，どうする，おこし？」，「2つのきびだんごさ，ここに入れてくんない？」などと会話しながら，きびだんごを作っている際にも，ゲンタはその場にはいるものの話には入れず，しばらくするとその場を去って一人で料理を作り始める。その後，戻ってきたゲンタに対し，キョウカは再び「きびだんご持ってって**ね**[j)]。ちょっと猿くんと犬**ね**[k)]，探してきて」と言うが，ゲンタは「え？」と戸惑う。そこでキョウカが「猿くんと犬**ねー**[l)]鬼に噛みつかれてんだよ。おだんご，きびだんご，持っていきなさいよ」と言うと，ゲンタは「はい。忘れないから。今ゲンタ，ケーキ作ってるから，キョウカちゃんにあげる」と答える。

（g:“注目を促す呼びかけ”，h:“提案の呼びかけ”，i&j:“念押し”，k&l: “間を繋ぐ”）

事例２では，キョウカによる「鬼」の発話に，ミカがすぐに「きびだんご」と応じており，その後も猿，犬，雉と言っていることからも，キョウカとミカの二者間では桃太郎のイメージが共有されていることが分かる（実際，事例２として挙げた以降のやりとりのなかで，キョウカは「桃太郎」と言っている）。こうしたことからは，キョウカとミカの間では，互いの情動や意図だけでなく，遊びのイメージをも間主観的に把握し，それを基に遊びを展開するようになったことが分かる。しかしゲンタには，そのイメージが伝わっておらず，キョウカが「ね」発話を併用しながらイメージを伝えようとする際にも，その言葉を額面通りに受けとるだけにとどまってしまっている（ゲンタは３歳児クラス進級当初より，キョウカ，ミカ双方と仲が良く，クラス内でも一緒に遊ぶことが多い子どもである）。

このことから３歳代においては，“一緒に遊ぶことが多い”や“同じ「場」に存在している”という条件のみでは，言葉の背景にあるイメージを間主観的に把握することは出来ず，親密な二者間だからこそ可能であることが示唆される。

そこで高櫻（2009）では，二者間と第三者との間で使用された「ね」発話について分析した。その結果，遊びの開始や内容，展開を呼びかける際に使用される「ね」発話に差異が認められた。すなわちキョウカ，ミカの二者間での呼びかけでは，“提案の呼びかけ”や“誘いの呼びかけ”の「ね」発話が使用され，相手の顔を見ないで呼びかけた際にも応答していたのに対し，第三者との間での呼びかけでは“注目を促す呼びかけ”が多く使用されていた。また第三者が二者間に働きかける際に“注目を促す呼びかけ”を使用した理由については，キョウカとミカの間に安定した関係が成立していたこ

とで，その関係内に踏み込むには，確実に相手の注意を引きつける必要があったためと考えられた（表１に示したように，“注目を促す呼びかけ”は，“提案の呼びかけ”や“誘いの呼びかけ”よりも，確実に相手の関心を自分の話題や遊びに向ける性質を持っている）。

以上の結果からは，幼児が相手との関係によって，相互作用に用いる手段を変えていること，その背景として幼児が相手との関係の親密さを間主観的に感じ取っていることが明らかである。すなわち幼児は，目の前にいる相手の情動や意図だけでなく，その相手との関係そのものについても間主観的に捉えていると言える。

【事例3：2月19日】キョウカが「ねーねー[m)]大っきいの車だよ」と提案し，ミカと2人でタイヤをアスレチックにくっつけていく。しかしその間にナミとツキコがアスレチックの中に入って，ままごとを始めてしまう。ミカは「ナミちゃんたち，ミカちゃんたちと遊ぶの？」と聞くが，ナミから「違うよ」と返答されると，すぐにキョウカが「ねーね[n)]そこ私たち1番，入ってたんだけど」と言う。それに対し，ナミが「いなかったじゃん」と言うと，ツキコも「いなかった」と主張する。キョウカも「タイヤ運んでたから，いなかったんでしょ。タイヤ運んでたから，いなかったんだよ」と説明するが，ナミから「だってさー，ここにいなかったんだから，いなかったんだから使っていいでしょ」と言い返されてしまう。そこでキョウカが「じゃ，ちょっとだけね[o)]」と言うと，すぐにミカも「じゃ，ちょっとだけ。じゃそこにしていいよ，もういいよ」と応じる。しかしナミたちからそれに対する返答がないのでキョウカは「ねーねー[p)]そこは私たちの部屋にしてくれたの，ミカちゃんが」と言う。

（m:“提案の呼びかけ”，n:“抗議の呼びかけ”，o:“念押し”，p:“注目を促す呼びかけ”）

クラス全体として３歳児クラス進級当初は，その時の興味に応じて遊びを転々とし，そこで出会った相手と遊んでいたのに対し，この時期にはそれぞれが一緒に遊びたい相手を見つけ，その相手との遊びが行われるようになっていた。そのため１対１だけでなく，ペアやグループ同士の間で遊び場や遊びの内容をめぐるやりとりが交わされるようになっていた。こうした変化を受け，二者関係内での互いの情動や意図だけでなく，自分たち以外によって生起された事象に対する情動や意図を間主観的に把握し，それを基にペア間やグループ内で行動を一致させることが求められるようになっていく。

この点について事例３では，ミカとナミのやりとりを受けたキョウカがすぐに抗議する一方，ナミたちがその場所を使用することに同意したキョウカにミカが同調している。また主にナミがキョウカとミカのペアに対応しているのに対し，キョウカとミカは，それぞれがナミとツキコのペアと交わす発話を受け，交互に応じている。

以上のことからは，キョウカとミカが自分たち以外によって生起された事象（自分たちの遊び場への第三者の侵入）に対する互いの情動や意図を間主観的に把握した上で，行動を一致させている（抗議や許容）ことが分かる。またキョウカの「ねーねーそこは私たちの部屋にしてくれたの，ミカちゃんが」という言葉には，遊び場を譲ったことに対するナミたちからの返答がないことへの抗議だけでなく，自分たちの結束の強調とミカへの配慮が示されている。このようなキョウカとミカの二者間での互いへの配慮としては他に，ミカが母親の出産に伴うキョウカの不安を間主観的に把握する姿などが認められた。

【事例4：2 月 5 日】室内での自由遊び時間。キョウカとミカは一緒にブロックで遊んでいる。ミカは「ミカちゃん今さ，電車作ってんだよ」と教えた後，「キョウカちゃん，ミカちゃんはもうキョウカちゃんと遊ばないよ，ずーっと」と言う。するとキョウカは「分かってるよ。でもたまにはいいでしょ」と言うが，ミカは「だめ」と応じ，キョウカが「なんで？」と尋ねても，ミカはただ「だめ」と返答する。それでもキョウカが諦めずに「なんで？」と尋ねると，ミカはようやく「マヤちゃんに言われたくないから。でもたまには遊んであげる」と言う。キョウカは納得した様子で，その後はこの件について2人とも話すことなく，いつものように一緒に遊び続ける。

事例４でミカがキョウカと遊ばないと言った際の口調は，普段の会話と同様のものであり，この場面ではブロックの取り合いなど，ケンカが生じるようなきっかけもなかったため，筆者にはミカの発言が突如に思えた。またキョウカがすぐに「分かってるよ」と返答した姿にも違和感を抱かずにはいられなかった。確かに，この時期のクラス内では一方の発言に対し，悔し紛れに本来の自分の思いとは正反対の言葉で応酬する姿も観察されていた。しかしキョウカの様子はそれとは異なり，むしろミカの思いを尊重しているかのようであった。そこで片づけの時に筆者のそばに来たミカに「マヤちゃんに何か言われているの？」と尋ねたところ，ミカは「マヤちゃんが少しはキョウカちゃんと離れなさいって言うの」と教えてくれたのである。

事例４が観察された時期のキョウカとミカは，２人だけで遊ぶ場合もあれば，第三者を含めた小集団で遊んだり，それぞれが別の子どもと遊ぶ姿も観察されていた。しかし他の子どもたちには，キョウカとミカが二者間で共有しているイメージを理解できないこともあり（e.g.事例2），二者間の繋がりの強さを前にして疎外感を感じてしまうこともあったようである。特に，女児の少ないクラス内において，特定の遊び相手を見つけられずにいたマヤには，キョウカとミカの関係が羨ましかったらしく，主にミカに対して，キョウカと離れるように言っていたのである（この点については，担任保育者も認識していた）。そしてキョウカもミカがマヤから自分たちの関係について言われていることを知っていたため，事例４ではこの話題を打ち切ったのだと思われる。

以上より，本研究では，間主観的に捉える対象が“目の前にいる相手の情動や意図”（事例2）だけでなく，“遊びのイメージ”（事例2）や“自分たち以外によって生起された事象に対する情動や意図”（事例3），“相手との関係性”へと広がっていくことが明らかとなった。ただし第三者との関わりにおいて間主観性に差があることが示されたことからも，幼児間の間主観性には親密性による違いがあると考えられる。

すなわち互いを間主観的に把握していく過程の中で親密性が形成されていくと言えるが，それは同時に，間主観的な相互作用が幼児間の親密性を判定する１つの指標になることを示している。この点についてキョウカとミカの二者間では，間主観的な相互作用が対等に交わされており，それに基づく互恵的な言動も見られるとともに，第三者から見てもその関係が特別なものに感じられていたことから（事例4），親密性の形成が認められる。

総合的考察

「親密性」を基軸とした遊びと仲間関係の共発達に関する一連の研究の１つとして，本研究では間主観的な相互作用と親密性形成との関連について検討した。

研究１では，間主観的な相互作用として，高櫻（2007）において親密な二者間での特徴的な使用が認められた「ね」発話を取り上げ，そのカテゴリーを作成するとともに，二者関係の発達に伴う変化について検討した。その結果，「ね」発話は 15 の機能別カテゴリーに分類され（表1），「ね」発話が関係形成に影響するだけではなく，相手との関係の深まりが二者間で使用する「ね」発話の種類や発話数に反映することが明らかとなった。

これは「ね」発話が持つ性質（「共に遊ぶことへの志向度」を基盤とした上で，「優先度」の影響を受ける）によると考えられる。すなわち同年齢他児に対する関心が増し，一緒に遊びたいという思いの高まりを受け（共に遊ぶことへの志向度），自分の思いを主張するだけでなく，自分と相手の意思を調整する必要が生じる（e.g. 自分の意思を主張する「ね」発話だけではなく，相手の意思に合わせる「ね」発話の使用が求められる）。その際，「ね」発話は幼児にとって身近なものであることに加えて，それまでに継続的な関わりのある特定の相手との間では，自分と相手のどちらの意思を優先する意図を持っているか（優先度）が間主観的に伝わりやすいために関係の深まりに影響を及ぼすと考えられる。

そこで研究２では，一組の子どもによる相互作用について間主観性の観点から考察した。その結果，幼児が目の前にいる相手の情動や意図だけでなく，自分たち以外によって生起された事象に対する情動や意図，遊びのイメージ，さらには相手との関係性についても間主観的に把握していることが明らかとなった。またこれらに対する間主観的な把握においては，第三者との間に差があることが認められたことから，幼児間の間主観性には親密性による違いが生じることが明らかとなった。

以上より，間主観的な相互作用と親密性の形成（高櫻，2007）には関連が認められる。すなわち幼児同士が互いの情動や意図を間主観的に把握していく際，まず特定の相手との間での間主観性が先行すると考えられる。一方，一般に遊び相手の選択が偶発的であるとされる３歳代の幼児間に親密性を形成するには，まずクラス集団の中から自らの意思で互いを選択し合う必要がある（自発性）。つまり幼児間の親密性形成においてまず求められる「自発性」は，相手の情動や意図を間主観的に把握していこうとする際にも基盤となる。その上で幼児間においては自分の意思を主張し合うことで，自分が自発的に選択した特定の相手の情動や意図を間主観的に把握しようとし始める。このような関わりの積み重ねによって，間主観的な相互作用を対等に交わしたり（対等性），他者視点に基づく間主観的な把握（互恵性）が可能になっていくとともに，間主観的に把握する対象が互いの情動や意図だけでなく，自分たち以外によって生起された事象や遊びのイメージへと広がっていくと考えられる。そして二者間だけでなく，第三者から見ても，その関係が親密であると間主観的に感じ取れるようになっていくと言える。

よって幼児は互いを間主観的に把握していく過程の中で，親密性を形成していくことが明らかであり，この意味において間主観的な相互作用は親密性の形成に影響するとともに，幼児間の関係が親密であるかを判定する１つの指標になると言える。

ただし幼児同士が相手を間主観的に把握する上では，子どもの気持ちを養育者が間主観的に把握しそれに則って対応してくれる経験がまず先行(鯨岡, 2006, p.180)する必要がある。これを保育実践に置き換えて言うならば，まず保育者が幼児の情動や意図を間主観的に理解しようとすることが重要であり，そうした関わりの経験を基盤として，幼児の間主観的な相互作用を支援し，促進することが求められる。今後はこの点を踏まえた上で，本研究と同時期に観察を行った同一市内の保育園での結果を併せ，3歳児における遊びと仲間関係の共発達についてさらに検討することを課題とする。

引用文献

原孝成（1995）幼児における友だちの行動特性の理解－友だちの行動予測と意図－.心理学研究　第 65 巻第 6 号.419-427

鯨岡峻（2006）ひとがひとをわかるということ－間主観性と相互主体性－.ミネルヴァ書房.

中川美和・山崎晃（2004）対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連.教育心理学研究　第 52 巻第 2 号.159-169

岡本真一郎（1992）情報への確信・関与と文末表現. 愛知学院大学人間文化研究所紀要，人間文化　第 7 号.　1－18

岡本真一郎（1993）情報への関与と文末表現－間接形と終助詞“ね”の使用への影響－. 心理学研究　第 64 巻第 4 号. 255-262

高櫻綾子（2007）３歳児における親密性の形成過程についての事例的検討.保育学研究　第 45 巻第 1 号.　23－33

高櫻綾子（2008）遊びのなかで交わされる「ね」発話にみる３歳児の関係性.保育学研究　第 46 巻第 2 号.78－88

高櫻綾子（2009）遊びのなかで交わされる間主観的な相互作用についての検討.日本保育学会第 62 回大会発表論文集.　84

山本愛子（1995）幼児の自己主張と対人関係－対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性－.心理学研究　第 66 巻第 3 号.205-212

謝　辞

本研究の一部は，科研費（２０・９８３６）の助成を受けたものである。本研究にご理解とご協力を下さった，子どもたち，保育園の先生方，保護者の皆様に心より御礼申し上げます。